

森保

ストラテジー

サッカー最強国
撃破への長き物語

五百蔵容

カタールW杯における

日本代表の

「番狂わせ」は
奇跡か？
必然か？

緊急
出版!

「10回やれば9回負ける賭け」を勝ち切る

森保ストラテジー

驚異の戦略を徹底解説!

森保ストラテジー

サッカー最強国撃破への長き物語

五百蔵容

星海社

250



SEIKAISHA
SHINSHO

プロローグ

いつまでも観ていたい。終わって欲しくない。そんな試合でした。

2022年FIFAワールドカップ・カタール大会、ラウンド16、日本対クロアチア。ピッチでは、そこにいる全ての選手たちが個人としてだけではなく大きなグループとしても小さなグループとしてもまとまり、それぞれに巧緻を凝らし、味方を見て、敵を見て、状況判断を行い、決断し、果敢なチャレンジを重ね、ゴールを目指していました。彼らはたくさんのミスをしていました。ミスに拘泥するものは誰もなく、敵のミスは抜け目なく突き、味方のミスは補い合いながら、ひたすらボールを追いかけていたのです。サッカーをプレーする上である意味「当たり前のこと」が高いレベルで、素早く、それこそ一瞬の緩みもなく試合中間断なく詰まりに詰まっている。誰もが状況に前向きにコミットしている。そのエネルギーがモニターを通してヴィヴィッドに伝わってくる。ひとつひとつ全てのプレーが見逃せない、あらゆる点に複合的な見応えのある、もう二度とない瞬間、繰

り返せない試合。「これぞワールドカップの決勝トーナメント」というゲーム。

この大会のグループステージ、日本代表が入ったグループEは「死のグループ」。W杯4回の優勝を誇る強豪中の強豪国ドイツ、現代サッカー革新の礎を生み出した、やはり世界屈指の強豪スペイン。加えて、北中米カリブ海予選から大陸間プレーオフの死闘をくぐり抜け本戦に辿り着いた曲者コスタリカ。いずれも、毫も悔^{ごう}めることのできないチームばかり。国際的に見ればドイツ、スペイン圧倒的^{二強}のグループで、過去本大会出場6回のうち3回ベスト16に進出してきた日本としては、必達目標に掲げた悲願のベスト8進出が、これ以上は想定できないほど困難なミッションと化す組み合わせとなりました。ですが大方の予想を覆し、日本代表はドイツ／スペインに勝利。「死のグループ」を首位で通過。そこには、世界のサッカー界、サッカーファンが一樣に驚いた、森保一監督の戦略・作戦の妙がありました。

本書は、今大会グループステージ突破の大きな側面である、森保監督とそのスタッフによる「戦略・作戦」構想、立案、遂行の優秀性をピッチ上の現象から観察、分析、論じつつ、二つの敗戦——とりわけ、「終わって欲しくない」と思えるほど、サッカーの魅力が詰まった内容となったクロアチア戦から、それゆえにうかがえる限界を考えます。

そして、近年ますます発展を見せる現代サッカーの様相を踏まえつつ、森保監督の戦略的サッカー、日本サッカーがその流れの中でどう位置づけうるか考え、招来の展望を探ります。

第1章では、森保監督が指揮官として世に出たサンフレッチェ広島時代（2012～2017）を当時のJリーグ事情とともに振り返り、この時既に見せていた端倪すべからざる戦略家としての資質を再検討します。第2章では、21世紀最初の20年で、爆発的な進化を遂げた現代サッカーシーンを概観、その動向と戦略家・森保の仕事がどのような類似性を持っていたか、異なる点、問題点を抱えていたか検討します。その視角・論点を踏まえ、第3章から第5章まで、日本代表監督就任後の森保ジャパンの動向を追い、ことに「プレー原則、ゲーム戦略によって形成される大きな枠組み」「委任戦術」両輪の採用によってどういった進展が見られたのか、捕捉していきます。第6章では、カタール大会本戦での各試合分析を通じ、「戦略Ⅱ大きな枠組み」「委任戦術」の組み合わせが、最終的にどのようなチーム作りに落着いていたか検分。ドイツ、スペインとの戦いでは森保監督の打ち出した戦略の優位性が発揮され勝利に繋がったこと、逆にコスタリカ戦やクロアチア戦ではその特質を察知した敵手によってその優位性がロックされてしまい、最終的にまとまった

「チームの形」、そしてその選択を余儀なくさせられた弱点が結果を左右。日本代表史上画期的な活躍を実現したチームであるにもかかわらず、日本サッカー初のベスト8進出という必達目標を失陥してしまったドラマを虚心坦懐に見つめ直していきます。

森保監督が、日本サッカー史上稀代の戦略家であり作戦家であることは、いまや論を俟ちません。彼の歩みを辿り、カタールW杯における仕事との連続性を確認していくことは、2000年代、2010年代、2020年代を通じ劇的な革新を遂げた現代サッカーの行く末と日本サッカーの将来との緊張関係、交わる線を臨む旅になるでしょう。

目次

プロローグ 3

3つのゾーン 16／5つのレーン 17／ポジション一覧 18／サッカー分析のための一般的な用語・概念 20／
サッカーの四局面 21／戦術・作戦・戦術の概念 22／森保一プロフィール 23

第1章

戦略家・森保一の誕生
↳ サンフレッチェ広島監督時代 25

2010年代初期のJリーグ 26

ミシヤ・ペトロヴツチの超攻撃的サッカー「ミシヤ式」 27

ミシヤ式への対策 34

チーム戦略の視点から——ミシヤチームに施した森保監督の戦略的修正 37

第2章

現代サッカーと森保サッカー

59

問題の特定と改善——ミシヤサッカーの弱みをどう改善したか 39

特徴、独自性の認識——何が強みか? 41

「最低限求められる競争力」の客観的定義（競争基盤の明確化） 42

「勝利する可能性の高い戦略的枠組み」の構築——森保広島の堅牢なゲームモデル 43

中長期的な上積みとする要素——選手の特徴、自発性を活かす指導方針 53

サンフレッチェ広島時代の「森保戦略」特徴のまとめ 54

現代サッカーの爆発的発展——2000年代～2010年代、最前線の概況 60

均衡を維持せよ——ポジショナルプレーのメッセージ 64

「ゲーム」としてのサッカー——混沌を生むシステム 66

森保サッカーに内在する「混沌」への視角 73

日本代表監督・森保一（1）——チームの立ち上げ〜アジアカップ 77

ハリルホジッチ、西野を引き継いで 78

パナマ代表戦——可変システム・戦略的なスペースメイク・ボール支配 79

戦略的相貌その（1）——人的配置で「意図した攻略ルート」を作る 86

森保「均衡戦術」の問題点 87

ウルグアイ代表戦——優位を生んだ戦略思考 88

戦略的相貌その（2）——エリア戦略、メタ戦略 90

ウルグアイの狙い、日本の狙い 92

ポジティブな面とネガティブな面 95

立ち上げ時に垣間見える二つの戦略構想 99

2019 AFCアジアカップ——初戦から見えた「委任戦術」路線 101

イラン代表戦——森保戦略思考の炸裂 103

カタール代表戦——「委任戦術」の蹉跌^{さてつ} 105

姿をあらわした、大きな問題 108

アジアカップの戦いが残した課題 112

第4章

日本代表監督・森保一

(2) — 東京五輪をめぐる時節から見たもの

115

メキシコ代表戦 — 中間報告2020 116

日本のメキシコ対策 118

メキシコ代表戦、真の問題 121

東京五輪 — 中間報告2021 122

整備された攻守の組織 — 「大枠の戦略」と「委任」の整理 123

欠けていた「相手の対策への対策」 126

見えてきた「森保ジャパンの目指すトランジションサッカー」 128

戦術的柔軟性、多様性という課題 129

第5章

森保ジャパン、最終予選の戦い 135

最終予選開始時の森保戦略の現在地 136

第1節オマーン代表戦——委任戦術の「対応力」不全 138

第2節中国代表戦——委任戦術の収穫 139

繰り返される試行錯誤 143

「解決までに時間がかかる」という問題 147

改めて「委任戦術」を考える 151

第3節サウジアラビア代表戦——敵の「弱点」へのアプローチと、その反作用 153

分析に基づく備えと、典型的な「森保ジャパンの試合」 157

サウジがさらけ出す「弱点」を攻めることによって生じる日本側の「隙」 160

サウジのプレッシングの変化に対応できなかった「委任戦術」 163

第4節オーストラリア代表戦——「想定外」の応酬 166

日本のゲームプランを狂わせたオーストラリアのムーイ 170

日豪双方が直面する「想定外」 172

結果と課題 176

成果を見たアウェイ二連戦 178

第5節ベトナム代表戦——分析・観察・対応力 179

第6節オマーン代表戦——活かしきれない「戦術三笥」 182

三笥に1対1状況を提供するチーム戦術の不備 185

アジア最終予選、森保戦略の現在地 187

新機軸「4-3-3」の導入成功がもたらす、本大会への展望 190

「4-3-3」をめぐる不安要素・委任戦術の進捗・森保ラッシュの萌芽 193

第6章

2022 FIFAワールドカップ

カタール大会

197

〈ドイツ代表戦〉 198

ドイツ代表、カタールまでの道程 199

ドイツ代表分析——ハンジ・フリックのドイツ代表

202

フリックの目論見——動的な「ギャッププレーン」戦術

206

カタール本戦での「戦略」と「委任戦術」の現在地

211

前半——ハンジ・フリックの罠

216

後半——マッチアップ・ミスマッチ戦略

221

森保一のラッシュ戦略

226

〈コスタリカ代表戦〉

229

コスタリカ代表分析

230

スペイン戦で大量失点したコスタリカの守備

234

日本のコスタリカ対策

235

前半——コスタリカの変化、試される自発的対応力

238

後半——三笥を活かせないデジャ・ヴュ

241

コスタリカ代表戦でみえたもの

246

〈スペイン代表戦〉 249

スペイン代表分析——その強さの源泉 250

体幹直下にボールを置き 254

「中間的状态」維持の哲学、それを成り立たせる「ターン」 255

日本代表、フォーメーション選択の狙い 259

前半——解体されていく日本の「5-4-1」 263

スペインの先制点 269

後半に向けて 273

後半——森保ラッシュ戦略、再び 274

ルイス・エンリケとの駆け引き。スペインの「時間」を奪った日本 281

〈クロアチア代表戦〉 286

クロアチア代表分析 287

前半——変幻自在のクロアチア、食らいつく日本 291

戦略的・戦術的にロックされながらも先制点をあげる 296

後半——クロアチアの柔軟性にケアされた「森保ラッシュ」 298

ペリシッチの同点ゴールに詰め込まれた「戦術的不備」 299

クロアチアとの大きな差。そして—— 303

エピソード 306

初出一覧 312

〈スペイン代表戦〉

W杯

グループE 第3節

2022年12月2日

ハリーファ国際スタジアム（カタール）

日本—スペイン
2—1

モラタ 11'

堂安 48'

田中 53'

スペイン代表分析——その強さの源泉

サッカーという「ゲーム」は、「混沌とした状況を連続して生み出す」ことにすぐれて特化したゲームシステムを備えています。「広大な空間に過少に散らばる参加者個々がそれぞれの主観内では全てを認識しきれない速度・領域・方向で事態が止まることなく進行する」ゲームであるゆえに、「ゲームが表現する混沌状況に適応すること」が重要で、そのことによって混沌がもたらすデメリットを最小化し、自らの優位を作為し勝利の確率を高めるメリットに転化しなければなりません。そこでは、「必然的に混沌という状況が生じる」というゲームの仕組みにどう対応するか、明確な戦略が求められます。この戦略について、本書では、次の3つの方向性があるという見方に立っています。

- 混沌に「適応」する
- 混沌を「コントロール」する（起きないようにする）
- 混沌を「誘発」する

スペイン代表の拠っているポジショナルプレーは、第2章で論じたとおり、「適応」戦略

にあたります。

ポジショナルプレーの源流となったトータルフットボールは、1950年代のオーストリアで見られたアイディアを元に1960年代のオランダで発祥しました。1970年代、リヌス・ミケルス監督とヨハン・クライフによってFCバルセロナにもたらされた後、監督としてバルセロナに戻ったクライフがトータルフットボールを発展させたサッカーを具現化。その後、同じオランダ人監督のルイス・ファン・ハールがやはりバルセロナで展開したサッカーと合わせ、これらが現代のポジショナルプレーの直接的な基盤となります。

クライフによってカンテラ（下部組織）から引き上げられトップチームデビューし、ファン・ハールにも重用され2人から多くを学んだジョゼップ・グアルディオラが現在見られる形にポジショナルプレーを現代化、再現性の高い戦略、戦術としてバルセロナを率いて2008年シーズン以降、世界を席卷します。

スペイン代表は、グアルディオラのバルセロナの革新を待たずして既に2004年、機動性の高いグループを形成しショートパスを回しながら相手を崩していく「ティキ・タカ」と呼ばれるスタイルを追求し始めていました。ルイス・アラゴネス監督が植え付けたこのスタイルをベースに、グアルディオラのバルセロナの選手や彼らと二強を成していたレア

ル・マドリードの選手が代表の中核を成すことでチームを強化。時を同じくして興隆のま
ったただ中にあった現代的ポジショナルプレーとの融合が進み、2008年にEURO（欧
州選手権）で44年ぶりの優勝を果たすと、2010年ワールドカップ・南アフリカ大会で
初優勝、さらに2012年のEURO連覇と、黄金時代を築き上げます。以降、ティキ・
タカ+ポジショナルプレーがスペイン代表のアイデンティティとなって今日に至ります。

現在では、スペイン全体で、現代のポジショナルプレーで求められるスキルセット、チ
ームプレーに正しくコミットする意識を備えた選手たちが輩出されるようになっています。
監督のルイス・エンリケは、それが彼自身の哲学であるだけでなく、意図的に育成された
ポジショナルプレー新世代の選手たちが揃っているという状況もあり、原理主義的ともい
えるほどこのやり方を徹底しているものと思われます。その結果、ポジショナルプレーの
完成度においては2008年〜2012年の黄金時代をも凌ぐチームが作り上げられまし
た。ベーシックなポジショナルプレーだけでは難しい時代だといっても、これくらい突き
詰めると違いが作れる。基礎を極めれば十分強くなる、古典の極北といってもいいチ
ームです。

ブスケツ、ガビ、ペドリというバルセロナ組が、今回のスペイン代表中盤のベストメン

バーですが、彼らだけでなくチーム全体としてみても、ポジショナルプレーの素養を持つスペイン各地域出身の選手たちが選出されています。ただドイツの場合と同様、戦略的な幅の狭さが出てしまい、弱点となっている可能性が、スペイン国内からも指摘されていました。例えば2010年の南アフリカ大会当時の監督ビセンテ・デル・ボスケは、ポジショナルプレーの共通理解の高さをもつ選手たちの個の判断力、グループの判断力を最大限に活かしたチームを作りました。その時すでに、ティキ・タカだけでは勝てないからと、サイドアタック専門の選手を入れて、事態が詰まった時に状況打開するカードにしています。今回も確かに単独突破力のあるアンス・フアティを連れてきていました。ただ、そのアンス・フアティもバルセロナでしかるべき作法を身につけているからこそ呼ばれている意味合いが強く、状況打開の「異能」カードとしてのインパクトはさほど大きくなかったといえます。ただ、メンバーの隅々、彼らのピッチ上の一挙手一投足まで哲学が浸透している度合いは、スペインのほうがドイツよりも明らかに高い。「哲学」に準じる姿勢がより強く、そのことで戦略の幅が狭まったとしても、微調整能力で状況を変えていく、変えていこうとする意志を備えたチーム。それがルイス・エンリケのスペイン代表でした。

体幹直下にボールを置き

スペイン代表の選手たちは、個々の選手としてはどういいうスキルを求められているのでしょうか。

それは、「ボールを体幹の真ん中・直下に置く」ということです。

非常にシンプルですが、戦略の根幹という最大部分と個人の技術という最小部分をリンクさせる極めて重要なもので、スペインでは、特にポジショナルプレーを実践する人々の間では、とにかくそこから全てが始まるというスキルなのです。

なぜ、ボールを真ん中に、体幹直下に置くことが必要とされるのでしょうか。一言でいえば「何でもできるような状態に自分たちを置き続ける」ことができるからです。そこからであれば、右でも左でも、どんなパスでも出せるし、ドリブルもできる。どっちの方向へも動ける。何でも選択できることで、相手は何をしてきても自分たちが望むようにリアクションできる。相手が右から来ても左から来ても、突っ込んできても途中で止まってこちらの様子をうかがっても、利き足を狙ってきても、あるいはフェイントをかけて右を切ると見せて、左に切り直すみたいなのをするのだとしても。自分が何をするか、相手が何をしてくるか。これらを全部ひっくるめて、あらゆる状況に対応できる状態を可能な限り

継続する。それが、彼らにとつての「ボールを真ん中に置く」ことなのです。

何はさておき、まずボールを体幹直下に置く。そして、できるだけヘッドダウンせずに（頭を下げない、足下を見ない）ヘッドアップ（顔を上げ、できるだけ広い視野を確保する）し、つまりボールではなく周囲を見ながらプレーする。そのことで、相手の選手の動き、意図をしつかり観察できる。相手だけではなく味方も含めた周囲の状況、変化を見続けることができるし、情報を入れ続けることができる。そういった観察によつて、自分のチョイスであつたり、あるいは相手の動きを予測したうえでのリアクションといったこと、つまりあらゆる行動が可能になる。メッシやシャビ、イニエスタ、今回の代表であればブスケツ、ロドリ、ペドリ、ガビ、トーレス——皆、この基礎に習熟しています。

「中間的状态」維持の哲学、それを成り立たせる「ターン」

この基礎技術に対するアプローチは、フォーメーションをめぐる考え方とリンクしています。彼らは「4-3-3」を好んで用いますが、このフォーメーションであれば、パスコースを数多く確保するⅡフォーメーションの関係性の中に入っている一人一人の選手が、起き得るあらゆる状況に対してグループとして対応できるようになりますし、そのような

関係性を保ったまま、散開してピッチ全体をカバーすることができからです。

サッカーは、参加人数に対してピッチの広さが過大となるため、スペースが数多く流動的に発生するボールゲームです。その流動的に発生するスペースを効果的に制する、利用することがこのゲームで勝利するために重要になります。それを実現するため、「自分たちが不利になるような数的劣位が起きる状況をいかに抑制するか、攻略したいエリア、スペースでいかに数的優位を得てフリーの選手を作り出すか」という命題に名将たちは取り組んできました。ヨーロッパのサッカー大国のひとつ、イタリアには「サッカーは丈が足りない毛布」というたとえがありますが、確かにこのゲームのピッチの広さと参加人数の関係を考えると、「どこかで数的優位を作ってしまったら、どこかで必ず数的劣位に陥って敵にスペースを明け渡すことになる」。「丈が足りない毛布なので、身体のどこかを覆おうとすればどこかが露わになってしまう」ということになります。ポジショナルプレーが、スペイン代表が求める「パスでつながることが可能な関係性を維持したポジションの散開状態（「4-3-3」のフォーメーション）」とは、サッカーというゲームが突きつけてくる「あちらを立てればこちらが立たず」の問いに対するひとつの答えです。彼らは、中間の状態⇨関係性を維持した散開状態を常に保つことを重視します。密集もしないし、散り散り

にもならない。その中間の状態を保つことによって、自分たちが密集をしないといけない局面では相手よりも早く密集できるし、相手よりも分散して状況を打開しなければいけないならば、相手よりも早くその状態に変化できる。つまり、数的優位を作りたいときには相手より早く数的優位を作れるし、誰かをフリーにしなければならないならば、チームとして相手よりも早くそういう状況を取れるということです。より重要なことは、「中間的な状態」がフォーメーションや組織構造として明確に定義されているため、密集しても拡散しても、素早く中間的な状態に戻ることができる。それら全てがセットになることによって、様々な状況や選択に対して、何でもできるような配置の状況を自分たちが維持し続けることができるというもので、グアルディオラ以降彼らはそれを実践し続けています。今大会のスペイン代表も同様です。

こうした考え方に習熟し、そして体幹の直下にボールを置ける選手たちの大きなメリットが「ボールを守りながらターンができる」ことです。相手がどの方向から自分たちにプレッシャーを与えてきているかということを読み取ることさえできれば、相手のプレッシャーのベクトルから逃げられる方向を選んでボールを動かすことができます。現代のハイスピードなサッカーの中でそれを実現するには、「ターン」が一番効果的なのです。「右か、

左か」というゼロイチの選択では、相手のプレッシャーの方向付けを微調整されたら掴まってしまう。ターンができれば、相手を観察しながら、自らも動きながら、刻々と変化する相手の動きのベクトルと「とにかく異なるベクトル」を選んで、ボールを逃がすことができる。それに対応して相手もプレッシャーのベクトルをチェンジしていくわけですが、そこで「パスによる関係性を維持した散開状態」が意味を持ってきます。個々が相互支援可能なポジショニングが既にできていて、「それぞれが体幹の直下にボールを置いてターンし、適切な方向に離す」と意思共有もできているので、ボールを受ける選手たちがボールホルダーのターンに合わせた場所をとり、身体の向きを既にとっている。

相手のプレッシャーに対応しながら、適切な方向にボールを逃すことを繰り返している
と、次第に相手を守れないところ、相手の守備陣形の弱い場所が出てきます。また、単にプレッシャーから逃れるだけでなく、そういった場所が生まれるようにスペインの選手たちはボールを逃がしていきます。プレッシャーが空転するということは、そこに投じた人員の仕事がその時間無為になる。相手の組織に穴が空く。そこを埋め合わせるために相手は動く。『「丈の短い毛布」のどこかが露わになる。どこかでスペースが生まれている、ことを意味しているからです。それがサイドの場合もあるし、中央の場合もあるし、ハーフ

スペースの場合もありますが、彼らはそのようにベクトルを変えながら相手の弱いところを探して、そこにボールを送り、ゴールに向かって前進していきます。これは相手がどんなフォーメーションであろうと、どんなプレッシャーのかけ方であろうと、すなわちどんな「予想外」の状況であろうと、基本的に応用可能な考え方です。ポジショナルプレーが「混沌に適応する」という戦略だ、という特質は、こういうところに現れています。

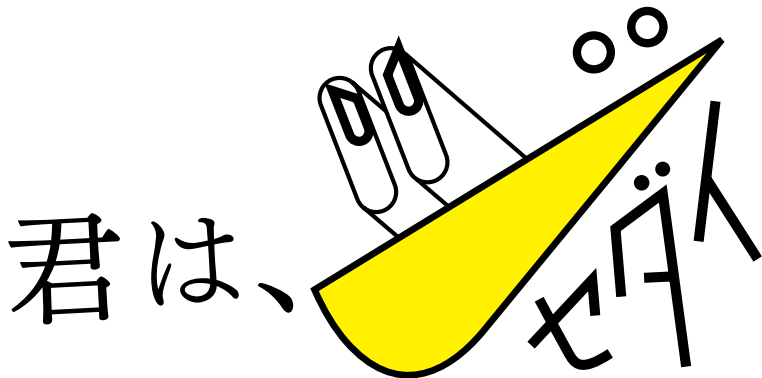
このような考え方のところに、試合を決める能力の高い選手——例えばリオネル・メッシ——がいたら、ほとんどの試合で勝利することができるでしょう。メッシがいたグアルディオラのバルセロナのように。

けれどもスペイン代表にはメッシがない。そして、彼らのやり方は非常に強力だが、戦略レベルで見るとひとつだけ弱点がある。

スペイン戦での森保戦略は、そこを突くものでした。

日本代表、フォーメーション選択の狙い

中央とハーフスペースの守備を優先的に固めながら、いかにその他のエリアを効果的に守るか。対ポジショナルプレー、対スペイン代表の対抗戦術としては必須のアプローチで



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!